

2005/ 1/ 28

組織エスノグラフィー研究会

文献発表レジュメ

山内研究室M1 森玲奈

harinezumi64@yahoo.co.jp

Maanen, J.V. (1988)

TALES FROM THE FIELD:ON WRITING ETHNOGRAPHY

森川 渉 訳 (1999) フィールドワークの物語；エスノグラフィーの文章作法，現代書館

第3・4章

3章 写実的物語

■ 特徴

① 経験に基づく著者（性）

テキストに著者の存在がほとんど消えており、対象文化の成員の言葉、行為、思考のみが描写されている。

EX. 「私はXがこれこれするのを見た」ではなく、「Xはこれこれをする」

② 典型的形式

調査地の人々の日常生活の細部に焦点を当てたドキュメンタリー・スタイル

③ 現地の人々の視点

忠実に編集された広範囲にわたる数々の引用

→ そこに提示された考えが現地の人間の意見であることを読者に伝えている

→ 疑問；現地の人間の視点、とは正確には何をさすのか？

→ 「解釈」の問題へ

④ 解釈の全能性

文化をどう解釈するかに関する決定権は書き手であるエスノグラファーにある。

「解釈の全能性とは単に、一つの解釈を他から区切って固定し、それに代わる解釈がこっそりと視界に忍び込んでくるのを許さないようにするものなのだ。語り手は、現場をわがもの顔で歩き回り、あれこれ起こる出来事について語る受動的な観察者として、対象集団を代弁する。（中略）エスノグラフィーにおけるリアリズムとは、かくも異常なまでに素晴らしいものである。」

■ 実例

- ・アメリカの警察機構における巡査部長を扱った物語
- ・現場でのフィールドワーカーを取り巻く調査環境の実態論的な特徴は、それがいかなるものであれ、そのテキストから取り除かれる。

「フィールドワーカーは、自分の存在やその技術は対象社会の風景の『ありのままの状態』と潜在的に汚染する危険があると考えているので、そういった恐れを中和する手段として広く認められた手段に訴えかけるよう心を砕かなくてはならない。」

■ パースペクティブ

- ・書き手は分析のフレームワークを提示しているにすぎない

「これは私の考えではない。彼らのだ。」(対象者の視点が全面に押し出される)
それにもかかわらず、物語の焦点は限定され、最後の結論部分で多少とも解決を見る一つの特定の問題(パラドックス)に結びつく。

※写実的物語のテキストの組織化を行う上での一種の約束事

■ 「物語」を終わらせるための手段

- ① 高く評価された機能主義的概念や社会システム概念の中に各素材を分類整理する方法(今日では以前ほど高い評価をえられてない)
 - ② 一つ一つの活動、パフォーマンス、儀式、役割など構成要素の間を動き回る方法
 - ③ 一つ一つの集団を一日、一週間、一年サイクルで追跡する方法
- これらの組織化の図式はすべて、概して提喻(一部が全体を示し得る比喩)によって機能する。

■ あらゆる種類のエスノグラフィーに通用する一種のメタ・セオリー

- ・社会的・歴史的孤立状態で書かれるエスノグラフィーなどありえない

「フィールドワーカーは悪名高きなんでも分析屋であって、いかにしてフィールドワークの素材は概念化されるのかに関する流行の理論をかぎつけ、常に時代の先端にしようと理論の波を乗り切っていく。時代が移り変われば、写実的なメタファーも報告のスタイルも変化するのである。」

■ 写実的物語の限界

- ・神秘的なテクニクに依存した、リアリズムの厚かましい盗用
- 第4章では、エスノグラフィーの別な形式である告白体の物語を考察

4章 告白体の物語

■ 特徴

- ・近年ますます人気のでてきたジャンル
- ・多くの点で写実的なフィールドワークと好対照
- ・高度に個人的なスタイル
- ・書き手自身のために書き手自らが与える大きな権限

EX. フィールドワークに潜り込む苦勞話

フィールドワーク中の信頼に関する寓話、耐え忍んだ困難に関するメロドラマ

フィールドワークがフィールドワーカーに何を与えてくれたかについての話

「フィールドワークと科学的に十分信頼できるとは言えないまでも、少なくともどこに出しても恥ずかしくないものになろうという願いが、ほとんどの告白体の核になっている。」

■ 文章作法

① 人格化された著者（性）

作家＝フィールドワーカーが書くものは、特にその仕事かどのようにして生まれて出てきたのか明らかにしようとする。

→ 人格化された権威＝著者性が必要になってくる

EX. 「Xはこれこれをする」ではなく、「私はXがこれこれするのを見た」

告白体の多くは、フィールドワーカーの人間性と読者に納得してもらうために書かれる

② フィールドワーカーの視点

- ・自伝的細部の増大

→ 提示される視点はフィールドワーカーの視点

「研究を始めるときには、ある見方で物事を見ていたフィールドワーカーが研究を終えたときには、まったく違った見方で物事を見るようになる。世界を見るその新しい見方は、現地の人々の視点と同じだと主張されるのが常だ。」

- ・ フィールドワーカーはフィールドワーカー

→ フィールドとの間に境界線を引く必要性

③ 自然さ

- ・ 通常、どこか他の場所で作者が書いたり示したりした写実的な書き物をすべて支持して終わる。

- ・ 完全に自己満足に浸りきってはおらずとも、通常、陽気で肯定的な調子で終わる。

「調査環境を平準化し、フィールドワークも他の仕事とそれほど変わらないのだという感覚と読者に伝えるには、中庸が大切な鍵となる。風変わりなものは重要視されず、芝居じみたものは控えめに述べられ、強烈な感情は無視され、他人のことを気にかけるという馬鹿げた振る舞いが告白体の物語の中に入ってくることはない。」

■ 実例

「ジョニーは銃をとる」

（「あるアメリカの警察署におけるエスノグラフィー的データお研究結果に関する覚え書き」）

■ パースペクティブ

- ・ フィールドワークを取り巻く公然のヴェールを剥がす

「ある文化をリアリズムに則って描いた場合には起こりえないような方法で、フィールドワークの経験の不正確な主観が、フィールドワークの告白に忍びこむ」

■ 結び

- ・ 写実的物語と告白体の物語は相互補完の関係

写実的物語	著者が知っていることを題材としてとりあげる しかしそれらの知識をどのようにして手に入れたかは大概無視される。
告白体の物語	ある知識を持っている著者自身を題材として取り上げる 書き手がフィールドワークの結果何を知ったかは、概して避けて通る。

